

中国民間文学事業の発展と現状

賈 芝

中国は多くの民族から成り立つ国家であり、歴史も古く、地域も広い。ここに伝わる各民族の民間口頭伝承の豊富多彩さは、世界でも類を見ないものである。『詩経』や『楚辭』にはじまり、『山海経』や『搜神記』を経て後世へとつながる記録された民間文学の流れも、とだえることなくつづいてきた。それらの民間伝承の乳汁を吸って名をなした詩人や作家もまた少なくはなかった。

一九一〇年代の末にはじまる「五四」新文化運動のなかで、「貴族文学に反対し、平民文学を提唱する」というスローガンのもとに、民間文学が学者や研究者たちの研究対象となり、近世歌謡の採集がはじめられた。西欧の学術の流入にともなつて民俗学も紹介された。新文学運動の指導者の一人で、無産階級革命の先駆者であった李大釗も、みずから民間歌謡と諺語の採集に加わつた。周作人は民俗学と民間文学の分野で貴重な見解を発表した。疑古派の顧頡剛は「孟姜女故事」の研究をするとともに、神話伝説を歴史学の対象として取りあげた。鄭振鐸は『中国俗文学史』を書き、詩人の劉半農は『北京大学日刊』で歌謡の編集にあたり、のちには内モンゴルへ「爬山歌」の採集に出かけたものも、不幸にも病没した。

一九三〇年代になると、南方の学者たちによって、民俗学と民間文学の採集調査と研究活動が進められた。また左翼文学運動のさなか、魯迅は文芸大衆化の論争のなかで民間文学についてのすぐれた

見解を語つた。瞿秋白も当時は民間文学に着目し、これを評価していた。作家の沈雁冰（茅盾）も神話に関する著述を公けにし、鍾敬文や楊成志は中国の民間故事の研究を進め、その分類法を紹介したりした。当時採集された民間故事や伝説の多くは、北新書局から林蘭の名で編集して刊行され、四、五十冊に及んだ。これらの資料は、ほとんど漢族地区に限られ、採集記録の方法もまちまちであったが、なかには今日から見ても貴重な仕事も残されている。

一九四二年に発表された毛沢東主席の『文芸講話』は、わが国の民間文学工作に一つの時代を画すものであった。多くの作家や芸術家たちが、民間文学の採集整理に従事することになった。解放区では、晋綏地区の民間故事を集めた『水推長城（大水が長城をおし流す）』が出版され、作家の周立波が東北で「長工（作男）」と地主の話』を記録し、民間芸人の韓起祥が『劉巧兒団円』などの新しい語り物を作り、文学工作者と音楽工作者の合作による『陝北民歌選』も出版された。

中華人民共和国の建国以後、一九五〇年の初めには中国民間文芸研究会が成立し、計画的な発掘と整理を進める態勢がととのえられた。一方、朱自清の『中国歌謡』、聞一多の『神話と詩』、丁山の『中国古代の宗教と神話考』、茅盾の神話研究の著述などが重印され、余嘉錫の『論学雜著』や任二北の『敦煌曲校録』のような研究

書も出されて、民間文学研究に刺激を与えた。

一九五八年、毛沢東主席がみずから提唱して、全国的な採風運動が展開されることになった。この時期に採集され、出版された、さまざまな地区と民族と形式による民間文学作品は、前例のないほど大規模なものであり、まさに民間文学研究の最初の黄金時代であった。

しかし、この活況も一九六六年以降の十年にわたる動乱で、手痛い打撃をうけた。「四人組」が打倒されてから、われわれの仕事はようやく再建の道を歩みはじめることとなった。

この数年来、われわれの仕事は急速に発展しはじめている。中国民間文学研究会は全国の省、市、自治区（台湾省をのぞく）にすべて分会が成立し、文化大革命以前とくらべると三倍も多くの分会ができたことになる。このほか地域によっては県単位の研究機構もでき、たとえば雲南省では、地区や県別に十八もの組織が作られている。

採集工作の回復とともに、われわれは三つの英雄史詩、すなわち百五十万行におよぶチベット族の史詩「格薩爾（ゲセル）」、キルギス族の史詩「瑪納斯（マナス）」、モンゴル族の史詩「江格爾（ジャングル）」の採集、翻訳、出版を重点的に行なうことにした。さらに広西チワン族自治区では、柳州一地区だけでチワン族の長篇叙事詩を百五十余部も発掘した。また雲南省の徳宏タイ族地区では、「阿鑾（アルアン）の物語」と呼ばれる長篇叙事詩を、史籍上に五百五十編記載されているうち百編あまり発掘した。このほか、メンバ族、ワ族、ラフ族などの人口のきわめて少ない民族にも、独特な史詩や叙事詩のあることがわかった。と同時に、これまで長詩はないものと考えられていた漢族にも、民間に伝わる長篇叙事詩のある

ことが知られるようになった。

このような採集工作の進展にともなって、民間文学をあつかう刊行物も各地で出されはじめた。文化大革命前には二種類しかなかった省クラスの公開刊行物が、現在では不完全な数字でも二十数種に及んでいる。さらに地区や県単位の刊行物もあって、雲南省の例では民間文学の常設欄をおく刊行物までもふくめると二十八種にのぼっている。単行本については、浙江省では十六の県と五つの地区で、それぞれの土地で採集された民間故事集が出版されている。この二年間に全国で出版された民間故事集は百四十数冊をこえ、

その内容もこれまで見られなかったほど広範囲に及んでいる。そのなかには、名山や大河の風物伝説があるかと思えば、各民族や土地特有の動植物の話もある。また省別や民族別に編まれたものも多くなっている。各地で伝統的な歌くらべの集會が復活したのを反映して、民間の情歌を集めた本も出された。

一方、これまで正当な評価を与えられなかった文人、名医、画家、科学者などの伝説も集められている。湖南省の屈原、四川・広東西省の蘇東坡、山東・会稽の王羲之、蘇州の唐伯虎、湖北省の華佗と王昭君、河北省涿鹿県の張飛、おなじく易県の荊軻などの伝説がそれである。これはさらに、長く排斥されてきた包公、海瑞などの清官や、秦の始皇帝、趙匡胤、劉邦、劉秀、諸葛亮、岳飛、韓信、劉伯温など、いわゆる「帝王将相」の伝説にまで及んでいる。

民間文学の研究面でも、「百家齊放、百家争鳴」の方針に支持されて、きわめて活発な状況が現われている。一九八一年の一年間だけで、全国の新聞雑誌に発表された関連論文は五百六十余篇に及び、専門書も六冊刊行された。その内容は、以下のようにきわめて多岐にわたっている。

第一に基礎理論の方面では、社会主義時期の民間文学の特性、民間文学の起源、民間文学と作家文学の關係などがあつかわれ、とくに原始芸術と原始宗教にかかわること、および採集整理の方法についてなどが論争の対象となっている。第二に、民間文学の形式の方面では、民間文学の分類、「花児」などの民歌の形式、各民族の神話の比較、大躍進時期の民歌の評価などが、問題とされている。第三に民間文学の歴史については、チベット族、モンゴル族、チワン族、ナン族、白族などが研究されている。また全国の各少数民族の文学を総体的に紹介する書物も、近く出される予定である。第四に、民間文学の研究史の方面では、明代の馮夢竜、民国期の蔡元培、魯迅などと民間文学とのかわりが研究されている。

昨年（一九八一年）には、中国民間文芸研究会によって第一回的一年会（年次研究集会）が開催され、発表あるいは配布された論文は四十数篇にのぼった。このほかの機関でも多くの学術報告会が開かれ、なかには「花児」討論会、呉歌討論会、革命故事討論会のようなテーマ別の研究会もみられる。

建国以後のわが国では、民間文学作品的な教育的な意義が重視されてきた。そのことが重要であることはいうまでもないが、そのために民間文学の科学的価値が軽視されがちであったことは否定できない。現在われわれは、採集工作にあたっては、細心に記録すると同時に、その地域の民俗や歴史についても調査研究する必要があることを強調している。

しかし、目下のところ、漢族地区と少数民族地区とをあわせて考えると、採集調査の進み具合にかなり不均衡なところがある。わが国のすべての民族文学の遺産と新しい口頭伝承を調査するために、全国的な調査の方式が早期にうちたてられなければならない。

また口頭伝承だけではなく、各種の手抄本や木刻本、さらに寺院の經書に残された民間文学作品の収集も必要である。そのような必要もあって、われわれは中国の民間文学と民俗学の資料館を作ること計畫中である。

民間文学研究の方法について、われわれはこれまで唯物論的な観点を堅持してきた。しかし、民間文学そのものは、民族や国境を越えて、世界的に流伝しているものである。その源流をきわめ、分布の状況を知るためには、比較研究の視点をもとりいれないわけにはいかないだろう。

中国の民間文学はたいへん豊富であるが、われわれの研究はまだ十分とはいえないし、遅れているところもある。われわれは各国の学者たち、とりわけ日本の方々に学ばなければいけないと考えている。日本の方々は、これまでも、中国の神話や民間故事について、多くのすぐれた研究をなしてこられた。みなさまのご好意で、このような機会がつけられたことに深い感謝をささげたい。今後、たがいに交流を強め、両国の民間文学と民俗学の研究がさらに発展するようにと努力しようではありませんか。

（か し・中国民間文芸研究会副主席）